

マタイによる福音書11章28-30節 「頸木にある憩い」

1A 「わたしのもとに来なさい」

1B 疲れている者、重荷を負っている人

2B 休み

2A 「わたしのくびきを負いなさい」

1B 柔和でへりくだった心

2B イエスの頸木

3A 「わたしから学びなさい」

1B 魂への安らぎ

2B 負いやすい頸木、軽い荷

本文

マタイによる福音書 11 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、マタイ 10 章まで来て、午後に 11 章を一節ずつ学びます。今朝は、28-30 節に注目します。「**28 すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。29 わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。30 わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。**」この箇所は、多くの日本の教会が、教会堂の看板や週報の中に入れて、人々をお招きする時に掲げている聖句ですね。それだけ、疲れている人々、重荷を持っている人々が多いということを知っているからでしょう。「悔い改めなさい。そして罪を赦していただきなさい。」なんていう聖句を掲げることは少ないですね。過度の責任感から来る疲れが、社会全体を覆っているからでしょう。

1A 「わたしのもとに来なさい」

けれども、この 11 章全体を読みますと、イエス様がここで語られている言葉は、正確には弟子たちに対するものです。そして、イエス様ご自身が宣教の中で疲れを覚えていたに違いないのですが、父なる神から得た休息によって、この言葉を語られました。

福音宣教や奉仕の務めにおいては、さらに大きなストレスがあります。それは、「拒まれる」ということです。福音のことばを受け入れない、拒絶するということです。しかも、それが神を知らない異邦人や、神を度外視している罪人と呼ばれる人々ではなく、神に従い、神に仕えていると言われる人たちからのものであれば、かなり堪えています。イエス様が対峙しておられたのは、パリサイ派でした。バプテスマのヨハネは、牢獄に入れられています。イエス様は、ご自分が父なる神から命じられていることを行なわれ、あらゆる病や煩いを癒されているのですが、神の国がまだ到来しないのか？ということ、牢獄にいるヨハネが、彼の弟子たちを通してイエス様に尋ねてきました。

そして、イエス様は、バプテスマのヨハネが預言者、いや預言者以上の存在なのに、パリサイ派の者たちが彼の禁欲的な生活を、「悪霊につかれている」と中傷し、結局、彼の言葉を受け入れませんでした。そして、イエス様ご自身については、食べたり飲んだりしていると、「大食いの大酒飲み、取税人や罪人の仲間だ。」と言われてしまうのです。こうすれば、ああ言われて、ああすれば、こう言われるみたいな感じです。

おまけに、ご自身が最も力ある働きを行なわれた三つの町が、福音を拒みました。カペナウム、コラジン、ベツサイダです。そこに対して、ソドムよりもひどい裁きが来ることを宣告されました。最も労苦して仕えられたところで、究極の拒絶反応を示されたのです。

イエス様は、霊的な戦いを経験されました。しかし、窮することはありませんでした。吹っ切れたというか、安らぎを得ました。それは、父なる神の御手にゆだねたことです。人が福音を受け入れるか、受け入れないかということは、完全に父なる神が行なわれています。まず、知識を多く持っているのに拒んでいる人々がいて、知識も行ないも整っていない人が喜んで受け入れています。なぜか？御父が幼子のようなものたちに、ご自分のことを知らせておられるからです。神がそのようにされないかぎり、人は心を一センチでも開くことはできないのです。その人の努力や能力ではなく、父なる神が示してくださることをそのまま受け入れることが必要です。

そこでイエス様は、そこにある安らぎをもって、言われました。「**すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。**」私たちが、今、何をしなければならないのか？いろいろな試練や困難、反対がある時に何をしなければならないのか？イエス様のところに行くことです。この一歩を、多くの人は踏み出しません。自分でいろいろ考えて、いろいろ動いて、疲れを自分自身の上に積み上げています。なぜなら、父なる神が全てのことをしておられるということを信じ、受け入れられていないからです。へりくだって、幼子のようになって、神の示されるところに生きると、そこには安らぎがあります。

1B 疲れている者、重荷を負っている人

「**すべて疲れた人、重荷を負っている人**」と言われていますが、人生の中での疲れ、試練、困難を多くの人々が持っています。それは、重荷とイエス様が表現されているように、一つの責任感の中で生きています。その責任を負えきれないものがあって、疲れを覚えています。しかし、私たちは、しばしば主客が逆転します。そもそも、そんな重荷を負っている必要があるのでしょうか？私たちの主は、重荷を負いなさいと言われたのでしょうか？いいえ、イエスが重荷をわたしに任せなさいと言われているのに、「いやです、自分自身で解決します。」と言っているのです。

ここで、主としもべが逆転しています。それは、主人がしもべに責任を与えて、それを行いなさいと命じているのです。それで、その責任を話すのですが、主から命じられているということがどこか

で、すっとなでいます。それで、自分自身で何とかやりくりして責任を果たそうとしてしまうのです。主人が、「もう、これはやらなくていいんだ。」と言っているのに、「いや、これをやりつづけます。」と言ってやり続けてしまうのです。主人に言いつけて僕がどうするのでしょうか？主人に命令してどうするのでしょうか？逆ですね、主人が命令して、「はい、わかりました。」と主の下にいるようにしないといけません。主人の命令を聞くためには、絶えずその主人のところに戻らないといけません。それで、私たちのまずすることは、「イエス様のところに行く」ということです。

何をもって「重荷」になっているかを、よく考える必要があります。それは、究極的には「自分がこれこれをしたい！」と強く思っている情熱です。何をやっても、結局、このために自分は動いているという、自分を突き動かすものです。自分が何に引き付けられているか？多くの場合、先週の「自分のいのちを見出す」ということに関わってきます。自分の心を埋めたいと思って、やっていることがあります。こうやって、自分で勝手に自分に課し、自分というものが重荷になっているのです。主にお仕えしようとする、その中にでさえ、いつの間にか自分で何かを行なわないといけないと思います。負わなくてよい頸木を、重い頸木を勝手に言っていることがあります。そこで私たちが思い出す必要があるのは、「御霊に留まる」ということです。「御霊によって始まったあなたがたが、今、肉によって完成されるというのですか。(ガラテヤ 3:3)」御霊によって始まったら、御霊の内に続けて留まって、御霊に導かれる必要があります。そのためには、いつも初めのところ、イエス様のところに来るということを、しないといけません。

2B 休み

そして、「**わたしがあなたがたを休ませてあげます**」とイエス様が言われています。霊的には、父なる神から安らぎを受け取る所にあります。なぜなら、私たちの父は安息の神であり、安息、休みについてはエキスパートですから。六日働いて、七日目に休まれて、それを聖とされました。その神を父として持つておられるイエス様が、私たちに神の安息を与えることができます。

そして、ヘブル人への手紙、4章 10-11節を読みます。「神の安息に入る人は、神がご自分のわざを休まれたように、自分のわざを休むのです。ですから、だれも、あの不従順の悪い例に倣って落伍しないように、この安息に入るように努めようではありませんか。」ここで言っている安息は、天です。天に入る時に、私たちは安息の中に入ることができます。それまでの間、私たちは天にある安息を目指して、生きています。神の下さる天からの安息を思う時に、今、この時も御霊が降り注がれて、安息を得ることができます。

2A 「わたしのくびきを負いなさい」

そしてイエス様は、「**わたしは心が柔和でへりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って**」と言われます。イエス様のところに来たら、今度は、イエス様の頸木を負います。自分が肩には、重くなってしまう自分で作り出した頸木がありますが、それは取り外し、イエス様の頸木

を負います。

頸木とは、牛などが畑を耕すために畑において、まっすぐに耕すように、牛を制御するために頸にかける横木です。けれども、それは比喩的に、否定的にも、肯定的にも使われます。否定的には、どこかの国に征服されて、奴隷として捕え移される時に、くびきを負います。または、重税を課せられる時に、頸木が重くされたという表現もあります。肯定的には、主に自ら進んで従う時に、自ら負っていくものです。エレミヤ 2 章 20 節で、「実に、遠い昔にあなたは自分のくびきを砕き、自分のかせを打ち砕いて、『私は使えない』と言った。まさしく、あなたはすべての高い丘や、青々と茂るあらゆる木の下で、寝そべて淫行を行なっている。」とあります。主にお仕えしているその頸木を砕くと、自分の欲望のまま生きていき、それが自分の重荷となり、自分を疲れさせていくということです。

1B 柔和でへりくだった心

だから、イエス様から頸木を負えばよいのですが、そこにはパリサイ派の教えとの比較、対比があります。イエス様は、彼らについてこう言われました。「彼らは、重くて負いきれない荷を束ねて人々の肩に載せるが、それを動かすのに自分は指一本貸そうともしません。(マタイ 23:4)」主の戒め、命令は頸木なのですが、それを教える人によっては、重い頸木になります。それに倒して、イエス様の頸木は軽いのですが、それはなぜか？「わたしは心が柔和でへりくだっているから」ということです。イエスご自身が、父なる神から学んでいるため、教えを受ける人々の思いや心に寄り添うことができます。その柔和な姿は、イザヤが預言しました。マタイが 12 章 19-20 節で、その部分を引用しています。「彼は言い争わず、叫ばず、傷んだ葦を折ることもなく、くすぶる灯心を消すこともない。さばきを勝利に導くまで。」葦そのものは、とても折れやすいのに、しかも痛んだ葦であります。イエス様は、それを折ることもなく教えられました。さらに、くすぶる灯心なのに、それを消すこともせず、御言葉を教えられました。主は慎み深く、静かにご自分の業を勧めておられたのです。それは、教える人が自分自身が教えられているので、その弱さを思いやることができます。

2B イエスの頸木

同じイザヤ書に、イエス様ご自身が頸木を負われていた箇所があります。「50 章 4 【神】である主は、私に弟子の舌を与え、疲れた者をことばで励ますことを教え、朝ごとに私を呼び覚まし、私の耳を呼び覚まして、私が弟子として聞くようにされる。5b 【神】である主は私の耳を開いてくださった。」イエス様は地上におられた時に、ちょうど私たちが朝のデボーションで、主から声を聞くのと同じように、神から学ぶ、弟子のようになられたのです。弟子の舌を与えた、とあります。そして、弟子のようにご自身が聞く者だったので、それで疲れた者に励ますことを教えることができました。

そして、「主は私の耳を開いてくださった。」とあります。これは聞く耳を開いてくださったとも読むことができますが、出エジプト記 21 章にあります、奴隷としての印なのです。「(その主人は)・・

戸または門柱のところに連れて行き、きりで彼の耳を刺し通す。彼はいつまでも主人に仕えることができる。(出エジプト 21:6) 奴隷が主人を愛していて、一生、主人に仕えたいと願う時に、主人の言うこと聞くことを象徴するために、耳にきりを刺し通すこと、イヤリングみたいに耳たぶに穴を開けるのでしょうか、それを行いました。イエス様は父なる神に対して僕のようになられたので、それで耳を開いていただいたのです。

「**わたしのくびきを負**」いなさいと言われていましたね。このようにして、父なる神から聞いていることを頸木としておられ、それを私たちにくださいます。イエス様はどのような霊的なライフスタイルを持っていたのでしょうか？ イエス様は 12 歳の時に、「わたしが必ず自分の父の家にいることを、ご存じなかったのですか。(ルカ 2:49)」と言われていました。父の家にいるというのは、子として父の言うことをいつも聞いているということです。「わたしはいつも、父のみこころにかなうことを行ないません。(ヨハネ 8:29)」「わたしが天から下って来たのは、自分のこころを行なうためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行なうためです。(ヨハネ 6:38)」またイエスは、「あなたがわたしに行なわせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げ」ました(ヨハネ 17:4)。イエス様は、ご自分で何かをされようとはしていないのです。あくまでも父がなさることを、行われたままです。

私たちがいかに、自分自身の頸木を負っているか知れません。イエス様の言われていることだけを行なっていればよいのです。けれども、これをしなければいけない、あれをしなければいけない、という自らの基準や規則を課して、自己実現というか、自分のものを探し出そうとします。

3A 「わたしから学びなさい」

そこで、イエス様は言われました。「**わたしから学びなさい。そうすれば、たましいに安らぎを得ます。**」つまり、イエス様は「来なさい」と言われました。そして「わたしの頸木を負いなさい」と言われました。そして、三つ目に「**わたしから学びなさい**」と言われていました。パリサイ人たちのようなところから学んだら、心が重くなります。それは神の教えではなく、人の教えだからです。けれども、今、話しましたように、イエスさまから学べば、魂に安らぎが来るのです。

1B 魂への安らぎ

主の道、主の教えのところには、魂の安らぎがあります。「エレ 6:16 【主】はこう言われる。「道の分かれ目に立って見渡せ。いにしえからの通り道、幸いの道はどれであるかを尋ね、それに歩んで、たましいに安らぎを見出せ。彼らは『私たちは歩まない』と言った。」主の御心を行なっているという確信は、心安らかにします。「1ヨハ 3:18-19 子どもたち。私たちは、ことばや口先だけでなく、行いと真実をもって愛しましょう。そうすることによって、私たちは自分が真理に属していることを知り、神の御前に安らかにされるのです。」

2B 負いやすい頸木、軽い荷

そして最後、ここが意外である言葉です。「わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです。」イエス様の頸木は負いやすいです。そして荷は軽いです。なぜでしょうか？イエス様の言われていることは、とても厳しく、重すぎて、自分ではできないと思ってしまいます。けれども、それは全く逆のことをしているのです。つまり、イエス様のところに来ないのです。イエス様のところに来ないのに、イエス様の掟を守ろうとして、自分で自分を苦しめていきます。イエス様はそんなことは一言も言われていません。イエス様のところに来て、イエスご自身が弟子となられて学んだことを、それを私たちに負わせています。だから荷も重くなるのです。

けれども元来、神の命令は重荷とはなりません。「神の命令を守ること、それが、神を愛することです。神の命令は重荷とはなりません。(1ヨハネ 5:3)」神との愛の関係がある時に、その命令を守ることは重荷とはならないのです。自分の愛している人の言葉は、私たちはやりたいと願います。そういった神との愛の関係がある時、神に言われることを行なうのは、その頸木は負いやすく、荷は軽いのです。私たちが荷が重いと感じているならば、それは神がそうされているのではなく、自分自身がそうさせてしまっていることを吟味すべきでしょう。神を喜ばすことではない、人を喜ばすなり、自分なりの神への近づき方をしてしまっているからだと思います。

実は、人を喜ばすよりも、神を喜ばすほうがやさしいのです。私たちが神のほうにもっと目を向けるのであれば、それはシンプルな生活です。単純なものを、私たちの罪や自分中心的な考え方で、複雑なものにしているのです。そして、神の掟さえ自己流の解釈を付けて、主の頸木ではなく自分の頸木にしています。主のところに来て下さい。そして頸木をかけるイエス様を思い出し、そうすれば魂の安らぎがきます。